

北海道支部と氷雪セミナー



蠣崎 悌 司

日本分析化学会の皆様、こんにちは、2020年度から2年間の北海道支部長を仰せつかりました北海道教育大学札幌校の蠣崎です。北海道支部は2016年度で創立60周年を迎えましたので、今年64年目になります。私は1982年に分析化学会に入会しているため、北海道支部には39年間お世話になっており、育てて頂きました。北海道支部では、2020年5月に第80回分析化学討論会を北海道教育大学札幌キャンパスで開催する予定でした。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて会場確保が困難となり、3月中は、異なる大会会場の再設定、あるいは、開催日の延期の可能性を思案する毎日でした。その結果討論会は、現地開催は行わず、講演要旨集の発行をもって成立することになりました。その経緯については、惜しくも昨年8月に急逝された内山一美前会長が「展望とトピックス」の巻頭言に残してくださいました。奇しくも、私が大会実行委員長を務めておりましたので、特に若い方の研究発表・討論機会を失うことになってしまったことが、深く心苦しんでいる次第です。新型コロナウイルスの感染拡大が一刻も早く収束し、皆様とお会いして研究討論・懇親が深められる日を楽しみにしています。

私は、大学院時代を通じて接触反応と極大波を利用した微分パルスポーラログラフ法による高感度分析法の研究開発に携わりました。皆様も経験済みのことですが、実験を進めるにつれて、実験器具が分析対象物で汚染されてきます。ガラス器具等を十分に洗浄したつもりでも、バックグラウンドにシグナルが現れるようになり、適切な洗浄技術が否が応でも身に付くことになりました。先輩からは、亜鉛や鉄などの一般的なものは実験室内の雰囲気にも漂っているほど、拭いきれないと教えられました。大学初等レベルの化学実験実習において、経験の少ない学生は、駒込ピペットで溶液分取するとき机にポタポタと液滴をこぼし、葉さじを使っての粉末試薬を取り分けるときにも散らかします。天秤を掃除した学生を見たことはありません。一目で洗浄の不十分なガラス器具を平然と使っています。このような場面では、「貴重な試料も安易に失い、汚してしまうのですか」と、口うるさく指導することになります。経験の豊かな会員の皆様はこのようなことにはなりません。それは適切な実験操作の作法を身に着けているからに他なりません。こじつけるようですが、対象物を汚染しない、自分も試料や試薬に暴露しない習慣を高度に身に着けている会員の皆様は、安々と新型のウイルスには汚染されないと信じております。

最後に、北海道支部の特色と伝統ある行事である氷雪セミナーを紹介いたします。その第1回目が昭和41年1月12日から14日に支笏湖観光ホテルにおいて開催されて以来、2020年度で通算45周年を迎えております。広大な北の大地に所在する会員が、「北海道の冬、それも新年を迎えて間もない時期に温泉（と多少のお酒）とともに、分析に携わる様々な人々と議論を展開する」という支部ならではの設定です。講演内容は分析化学に限らず、むしろ他分野の研究者が、専門の研究成果を懇切丁寧に素人にも理解できるように講義してくださいます。それは参加者には新しい刺激であり、講演を聴きながら、思わず「へえ」ともらしてしまいます。ともすれば専門領域にとらわれ固まりがちな頭に心地よい刺激になります。北海道外の会員の皆様にも、この様な有意義で楽しいセミナーに参加をお誘い致します。

〔Teiji KAKIZAKI, 北海道教育大学札幌校, 日本分析化学会北海道支部支部長〕